

平氏文化圏の周辺

——藤原邦綱をめくって——

西本寮子

はじめに

治承五(一一八二)年は歴史の転換点となる出来事が相次いだ年である。正月十四日に高倉院が崩御し、閏二月四日には外祖父平清盛が世を去った。そしてその清盛の後を追うようにして、同じ月の二十六日に高倉朝を支えた五条大納言藤原邦綱が亡くなった。邦綱は藤原基実の死後、膨大な遺領と家の記を含む文書類を、清盛の娘盛子(白河殿)に相続させるよう入れ知恵したことでその名を知られている人物である¹⁾。

本稿では、清盛とともに高倉朝を支えた邦綱に関わる記録の断片のいくつかをつなぎ合わせ、邦綱を通して平家の時代の一面について考察し、平氏文化圏の特質を解明するための一階梯としたい。

まず、『玉葉』によって邦綱の発病から死までの状況を確認する。高倉院の「七々御法事」が執り行われた閏二月三日、九条兼実は、清盛が重篤な状態であることと邦綱が二禁を煩っていることを知る。『平家物語』(寛一本)に「平大相国とさしも契りふかう、心ざしあさからざりし人なり。せめてのちぎりのふかさによ、同日に病ついで、同月にぞ失せられける」とあるのは、『玉葉』の一連の記事によるものではなからうか。翌四日には、清盛が亡くなったことおよび死を悟った邦綱が「六條之辺青侍家」で出家したことを伝え聞く。九日には静賢法印と語り、「天下滅亡期、當此時、太以歎息者也」と記すが、この頃から毎日のように邦綱の病状が記される。十六日には治療の甲斐あつて「心神頗落居、辛苦又滅氣」と安定したものの、二十二日には危篤状態となり、二十三日に亡くなった。

棟範出逢云、此未刻許一定了、臨終殊神妙、悦思不少、以黒谷聖人、為善知識云々、件上人、出家戒師也。邦綱卿者、雖出自卑賤、其心廣大也。天下諸人、不論貴賤、以其經營、偏為身之大事、因茲、衆人莫不惜、但平禪門滅亡藤氏、此人頗與其事歟、故有蒙神罰之疑、可恐々々。(『玉葉』治承五年閏二月廿三日条)

固唾を吞んで注視し続けてきた邦綱の死を惜しみながらも、兼実は清盛に与したることによる神罰を蒙った疑いがあると記す。兼実は邦綱の最期をかくも気にしたのはなぜか。その答えの一端は、葬送の

日の記事に見出せるように思う。

Ⅱ侍男共之中、為余多見吉夢、此十余日之間之事云々、(中略)

今夜、使大藏大輔泰茂修泰山府君祭、依夢想也、件男、先々此祭効驗也。
(同廿四日条)

清盛と邦綱の連携によつて所領や家の記を含む文書類を「横領」されたという不満を抱いていた兼実ら九条家方の人々にとつて、邦綱の死は待ちに待つた復活の時の到来と受け止められたのではないだろうか。夢告に導かれて泰山夫君祭を行ったのも、藤氏を滅亡に導いた清盛と邦綱の死によつて、心に期するものがあつたからである
とみたい。

二

次いで『愚管抄』によつて、兼実が「神罰」と記した邦綱の行動を辿つてみる。

清盛の娘盛子と摂関家の基実の結婚が成立したのは長寛二(一一六四)年四月九日、忠通の四十九日の喪が明けた直後であつた。それからわずか三年後、基実は二十四歳の若さで世を去つた。盛子の後見役邦綱は、基実の遺児基通の相続権を主張して、摂関家の所領と家の記を含む文書類のほとんどを母代である盛子とその父清盛が預かることを提案し、近衛家の基通に伝える道筋をつけた。世に言う「横領」事件である。邦綱のねらいは何だつたのか。

Ⅲサル程二其年ノ七月廿六日俄ニコノ撰政ノウセラレニケレバ、

清盛ノ君、「コハイカニ」ト、イフバカリナゲキニテアル程二、

邦綱トテ①法性寺殿ノチカゴロ左右ナキ者ニテ、②伊豫攝磨守

・中宮亮ナドマテナシテメシツカフモノアリキ。③コノ邦綱カ

清盛カガ許ニコキテ云ケルヤウハ、「コノ殿下ノ御アトノ事ハ、

必シモミナ一ノ人ニツクベキ事ニモ候ハヌナリ。……又故撰政

殿ノ若君モコノ御ハラニテコソ候ハネドモ、オハシ候ヘバ、シ

ロシメサレンニヒガ事ニテ候ハジモノヲ」ト云ケルヲ(以下略)

邦綱は法性寺殿忠通の厚い信頼により家司として取り立てられたことがその経歴からも読み取れる。諸国の国守を歴任する間に国犯ての事業で経営手腕を発揮、実務能力を高く評価されたことによつて昇進を重ねた。和泉、播磨、備前といった摂関家の知行国の守を歴任したのも、摂関家の信任を得たあかしである。「左右ナキ者」(Ⅲの①)であるがゆえの登用であるが、それが忠通による抜擢であつたとここに明示される(Ⅲの②)。延慶本平家物語はそのあたりの事情を、「下臈なれどもさかさしき者と思召て、法住寺殿御対面の時御感の余りに御物語有ければ、其よりして殿下殊に召仕て御領あまた給はりなどして候」と説明する。経営能力については兼実も認めるところであり(Ⅰ)、実務能力に長けた摂関家忠通の忠実な家司から出発したと認めてよい。このような経験を経て蔵人頭に任せられ、やがて公卿に列したのである。

清盛との関係を深めたことについて、『愚管抄』は、邦綱の側から清盛に近づいたと記す(Ⅲの③)が、これについては諸資料とも見

方がほぼ一致する。そのあたりから「入れ知恵」をしたといわれることになったものであろう。確かにその接近には意図的なものが感じられ、それが九条家の兼実や慈円に「横領」と映つたのであろうが、それが正鵠を得たものであるかどうかは、実のところ疑わしい。

兼実には、氏長者になつた後も『御堂関白記』を含む摂関家累代の「家の記」が伝えられなかつた。『台記』には『御堂関白記』からの引勘が多く、頼長が手元に置いていたことは間違いないから、その後の混乱を経て最終的に近衛家に伝領されたということになる³。摂関家の「家の記」は基実の跡を継いだ松殿基房にも兼実にも伝わらず、基実の子近衛基通に直接伝えられた。摂関家の「家の記」が接收されたのは盛子が摂関家の遺領と文書類を相続した時である可能性が高い。邦綱の関与がたしかに疑われるところである。

三

邦綱は、受領の最高位とされた摂関家領播磨守を務めたが、清盛もこの播磨守を経験している。邦綱と清盛、この二人の経歴を辿ってみると、異例の昇進速度と言ひ、官歴と言ひ、邦綱が清盛の後を追うように昇進していることに気づく。清盛も邦綱同様、摂関家すなわち忠通との深い関係を繫ぐことで信任を得たとみてよい。

田中文英氏は、摂関家が荘園経営を円滑に進める過程で、その権力構造のなかに平氏の武力を組み込んだと指摘する。保元・平治の乱以後、「家領支配のための権力構造の再編成」を余儀なくされた危

機的状況の中で、氏長者忠通が平氏武士団を武力的支柱としたとみるのである³。両者の緊密な連繋の始まりは、基実と盛子の結婚よりも前、保元二（一一五七）に行われた基実の任右大臣の大饗実施の際のことであると言うが（『兵範記』）、元木氏によればそれとは別にこのふたり、後白河院の院庁でも永暦元（一一六〇）年にともに公卿別当を務めていることにも注目しておきたい。

こうしてみると、十二世紀後半、政治的にも所領支配においても危機に直面した摂関家を支えたのは邦綱と清盛の二人だったことがわかる。実務能力で支えたのが邦綱、武力で支えたのが清盛であった。ともに摂関家に属し、それぞれに忠通の信任を得て力を蓄え、後に強固な協調関係を結んだことになる。

延慶本平家物語は「不浅し人なりし上に、頭中将重衡の舅にておわしければ殊甚深なりけり」と、邦綱と清盛との深い関係を強調するが、『尊卑分脉』によると、邦綱には養子を含めて十二人の子がある。そのうち嫡妻と言われる壹岐守公俊女との間に生まれた四人の娘たちはいずれも乳母になつた。成子は³六条院、邦子は高倉院、平重衡室でもあつた輔子は安德帝の乳母、そして綱子は建礼門院徳子の乳母である。さらに清邦を清盛の猶子としており、平氏との関係を幾重にも繋いでいることが知られる。高倉院と建礼門院の乳母になつた邦子と綱子が父の名を一字ずつもらひ、父の名を背負つているところにも、清盛との深い契りを顕示する意識を認めてよからう。

『平家物語』（寛一本）が、徳子の御産に際して邦綱が馬を献上した

ことを「心ざしのいたりか、徳の余りかとぞ人申しける」と記すのもうなづける。邦綱は清盛に接近し、協調関係を結ぶ過程で、幾重にも縁故の糸を張り巡らしたのである。

四

邦綱は相当量の文書を残した。内容は不明だがおそらく日記類すなわち「家の記」も含まれていたであろう。

IV 抑今日参院之次、以卿二位令申云、故大納言邦綱卿文書讀故三位中将重衡卿、彼卿進禪閣、々々借給故右中弁棟範朝臣、彼棟範死去之後、男棟時傳領之、棟時死去之時、先年自院被置蓮花王院。
(猪隈閔白記』承元三年六月十四日条)

故大納言邦綱文書の最終的な落ち先は蓮華王院だが、邦綱の死後まず娘婿である重衡に譲渡され、重衡から禪閣基通に進ぜられたという。なぜ重衡は邦綱文書を基通に献じたのか。「家の記」が重視された時代である。邦綱にあつても例外ではなからう。

基通に撰閔家領と「家の記」を伝える役割を負った盛子は治承三(一一八二)年六月十七日に二十四歳で亡くなった。白河殿盛子の死について、兼実は次のように記す。

V 白川准后、(兼実、玉葉)去夜薨去云々、(中略)、天下之人謂、以異姓之身、傳領藤氏之家、氏明神惡之、遂致此罰云々、余所思者、若大明神咎此事者、何十四年之間、不與其罰、何況此後彼資材所領等、豈被付藤氏乎、計以為公家之沙汰歟

(『玉葉』治承三年六月十八日条)

同じ日、白河殿の遺領が高倉院に接收されるのではないかという噂に接して「藤氏之家門滅尽了」と嘆いてもいる。撰閔家領の行く末を案じている兼実は、若くして亡くなった盛子に対して、先の引用 I の邦綱の死に際しての記事に通じる表現で感懐を記している。その意味で、平家方の所行と清盛に与した邦綱を快く思わない九条家側の物言いは一貫している。九条家方から見たこの間の事情とは別に、邦綱文書のなかには、撰閔家領と文書類を基実室の盛子に相続させ、撰閔家の重要文書の分散を防いだ張本人の行動と事情が詳細に記されていた可能性が高い。とすれば、邦綱文書は、基通がたにあつてこそ意味を持つ資料である。それがいかに重要視されていたかを示すものであろう。邦綱文書を誰が相続するのがふさわしいか、撰閔家を支えるための、邦綱と清盛の緊密な連繋の意味を知る重衡の判断はその一点にあつたのではないかと想像してみたい。この事実が、邦綱自身が撰閔家領のうち重要な邸宅等と大量の文書類を盛子に相続させ、基通に伝領されるよう取りはからつたのと対応していることに留意したい。

このように見てくると、既に指摘されていることであるが、盛子の相続は、九条家の人々が言うような「横領」では必ずしもなく、文書と撰閔家領、分散することなく基実―盛子―基通へと実質的に継承するための策とみられることになる。盛子が引き継いだ、撰閔家代々の家の記を含む文書類と邦綱文書が両方とも近衛基通に伝

えられたことをもって推せば、清盛と邦綱のふたりと撰閲家の関係の緊密さが理解されるのである。

以上、断片的に伝わる邦綱に関わる資料から、邦綱の動きをおつてみた。邦綱の方から清盛に接近したことは間違いないだろうが、それは撰閲家の危機を救うための協調関係、連繋であった。撰閲家の弱体化を憂えた邦綱が平家の力を借りたということを確認しておきたい。

五

高倉帝は堀河帝の先例を多く利用した事が知られている。堀河帝の母賢子は源氏出身であったから、平滋子を母とする高倉帝は堀河帝に親近感を抱いていたのである。その風潮は文化面にも及び、二人の帝の時代には文事が盛んであった。『弘安源氏論義』に、寛弘年間に成立した『源氏物語』について、「世にもてなすことは、すべらぎのかしこき御代には康く和らげる時より広まり、くだれるただ人の中にしては宮内少輔が積よりぞあらはれける」とあることはよく知られている。ちょうど『源氏物語』享受の転機となった堀河朝と高倉朝のころである。

ふたつの時代は、文事においてもいくつかの点で対応関係を見せている。堀河朝においては俊房、匡房をはじめとするすぐれた文人が出てくるが、堀河天皇自体「末代の賢王」（『続古事談』）と称された。一方、高倉帝については藤原定家が「文王」と評したことは有

名である。『源氏物語』をめぐっては、堀河帝とその周辺に重要伝本があり、令子内親王のサロンで巻々についての論義が行われた（『今鏡』）。高倉朝でも詩壇・歌壇とも活発な活動を行っていたが、建礼門院の周辺では源氏の世界が理想とされ、源氏文化が栄えた。その一端は、『安元御賀記』や『建礼門院右京大夫集』で知られるところである。

政治的に高倉朝を支えたのは清盛と邦綱である。しかし、彼らが文化面で貢献した形跡はほとんどないといつていい。文化的側面での時代の撰閲家に奉仕した人物に、『源氏釈』の作者藤原伊行がいることを思いおこしたい。伊行は、清盛と邦綱が関係を深めたと思われる永暦元年に『葦手下絵本倭漢朗詠集』を作成したほか、忠実の時代から撰閲家に関わる事跡が認められ、頼長、基実の上表文の清書をするなど能書としての活躍については小松茂美氏に詳しい。

特に久寿二（一一五五）年の忠通妻宗子の追善仏事の際の願文を清書しており、忠通との関係の深さが注目される。実務で信任を得た邦綱、武力をもって貢献した清盛、文事に携わった伊行の三人は同時に忠通のもとにいた。この事実を重く見たいのである。

おわりに

高倉朝を含む十二世紀の撰閲家にあつては、一条朝が理想と仰がれた。『今鏡』が高倉帝の帝紀を「さて、後一条院の御時より、近きやうに侍れど、十代に三代あまらせ給ひにけり」と、上東門院を

母とする帝を意識して書き起こすのもその現れである。何事につけ上東門院が吉例として利用され、弱体化していた撰閲家は、娘たちの入内に、上東門院のように皇子を生み、家の繁栄をもたらすことを期待した。『源氏物語』は人々が仰ぎ見たその一条朝に生まれた古典である。

邦綱の家系をさかのばれば紫式部がいる。世尊寺伊行の祖は行成である。このふたりは一条朝に活躍の場を得た。ひとりには『源氏物語』の作者であり、もうひとりには『源氏物語』の写本を持っていたとされ、能書家にして卓越した実務能力で道長に抜擢された人物である。思えば行成は道長と同じ日、万寿四（二〇二七）年十二月四日に世を去っている。

『源氏物語』の成立と流布に関わった人々の子孫たちが一五〇年の時を経て、ふたたび撰閲家を支えることになった。『源氏物語』を介してふたたびその子孫たちが撰閲家の周辺に集まったことには不思議な縁を感じざるを得ない。

〔注〕

- (1) 邦綱については赤木志津子「藤原邦綱考」（『撰閲時代の諸相』一八九八年、近藤出版社刊）、元木泰雄「和泉守邦綱考」（『和泉佐野市史研究』三、一九九七・三）詳しい。そのほか元木「院政期政治史研究」（一九九七年、思文閣出版刊）にも言及がある。
- (2) 『愚管抄』は日本古典文学大系による。

(3) 松園斉「日記の家——中世國家の記録組織——」（一九九七年、吉川弘

文館刊）参照。本稿をなすにあたり参考にした点が多い。

(4) 『平氏政権の研究』（一九九四年、思文閣出版刊）参照。

(5) 『愚管抄』では成子を嫡女とする。

(6) 賢子は源頼房の娘であるが、師房の猶子として白河帝に入内した。藤原氏出身の女性を母としない帝という点で共通する。

(7) 仁木夏実「高倉院詩壇とその意義」（『中世文学』五十号、二〇〇五）

参照。

(8) 『平家納経——平清盛とその成立——』（二〇〇五年、中央公論美術出版）

他参照。

(9) 拙稿『無名草子』再読——歴史認識のあり方をめぐって——（『中世王朝物語の新研究』（二〇〇七年、新典社刊）掲載予定）で触れた。参照されたい。

——にしもと・りょうこ、県立広島大学人間文化学部教授——